

# 知的生産のフロンティア

みんぱくの初代館長、梅棹忠夫は世界各地で学術調査に携わった。そこで生まれたフィールドノートやスケッチといった資料は多くの論文や著作へとまとめられた。梅棹が手作業で実践した知的生産の方法と考え方は、情報技術が発達した今日も有効性を失っていない。まもなく開催される企画展と連動した本特集では、梅棹の知的生産の過程とその方法論を概観し、未来のアーカイブズのあり方を考える。

X0241166、1955年「梅棹忠夫アーカイブズ」より



## 梅棹忠夫生誕100年記念企画展

### 知的生産のフロンティア

会期 4月23日(木) — 6月23日(火)  
場所 本館企画展示場

## 知的生産のフロンティアへようこそ

小長谷有紀 日本学術振興会 監事  
民博 客員教授

梅棹忠夫(一九二〇〜二〇一〇年)は、一九五七年、文明学ということばがまだあまり使われていなかったころに「文明の生態史観序説」を書き、日本と西欧の平行進化など社会の複線的な展開をしめして文明論を開始した。一九五九年には「妻無用論」で、女性たちの社会進出をあとおししつつ、男女雇用機会

均等法制定より四半世紀前に早くも女性論を文明論の柱のひとつにすえる基礎とした。一九六三年になると、未来学者アルビン・トフラーの『第三の波』に先行すること一七年、「情報産業論」でポスト近代にはコンテンツが産業の中心になると予測していた。このように、梅棹はつねに知的生産のフロンランナーだった。

### 「知的生産」の産みの親

インターネットの検索エンジンで「知的生産」という語を検索すると、ざっと六七〇〇万件ヒットする。

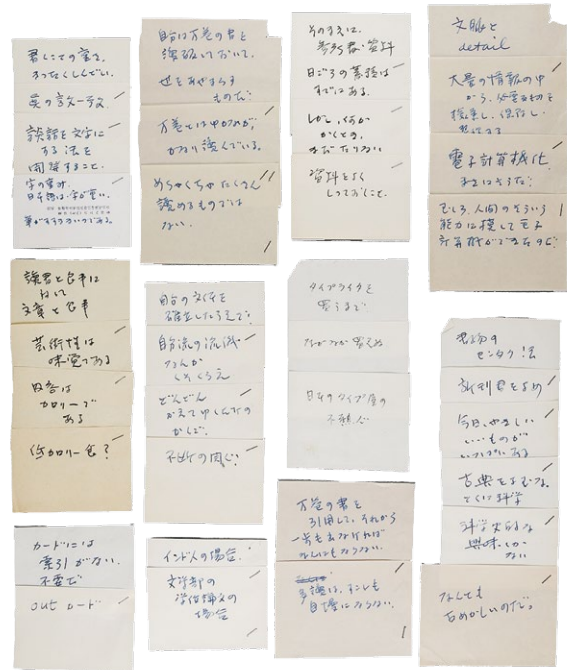


モンゴルのフィールドノート (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

あたりまえに使われているこの語の産みの親はまぎれもなく梅棹である。岩波新書の『知的生産の技術』(一九六九年)にはじまる。

当時の編集者によれば(梅棹忠夫——知的先覚者の軌跡)二〇一一年、千里文化財団)、こんなハウツーものは売れないと会議で却下されたものの、その年のベスト四位になるほどよく売れた。ちょうど、日本の産業構造が転換して人びとの勤務先が工場から事務所や店舗へとシフトし、「生産」の現場で「知」の具体的な方法が求められたからだろう。

ただし、同書の人気は今も衰えていない。二〇二〇年、梅棹の生誕一〇〇年を迎えると同時に、同書もまたちょうど二〇〇刷に達しようとしている。コンピュータ以前に書かれた内容が今なお読まれているのはなぜなのか。



「知的生産の技術」のための「ござね」。文章を書くためのメモ用紙は罫罫の部品に例えて「ござね」と名付けられた (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

糸井重里は、梅棹を「見えない道具も見える道具もつくる」と形容し、大工の子孫であるという点で吉本隆明と共通することを指摘しながら、手作業をいわずに道具をこのむ精神

が名著『知的生産の技術』を産み、先駆的な「情報産業論」を開いたとみている(『考える人』二〇一二年夏号、新潮社)。

たしかに、梅棹はアイデアを文章にまとめるなら紙片を使うのがよいと読者に対して見える道具を勧めている。こうした見える道具はコンピュータの無い時代だからこそ提案された。さしずめ現代なら、文章作成支援ソフトを使えば同じことが簡単にできてしまう。つまり、コンピュータ



フィールドノートから転記されたローマ字カード (撮影：尼川匡志、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

約五〇冊のノートに書かれた内容を、タイプライターを使ってローマ字書きでカードに転記した。ローマ字カードは約五〇〇枚。見出しに応じて分類し、自家製の小さな紙袋に入れた。

さしずめ現在なら、ノートの中身をテキストとしてデジタル化しさえすれば、あらかじめ分類しなくても、検索によって必要事項を簡単に抽出しうる。が、全ノートをデジタル化するのはいかほどの労力であり、それほどの手間をかける価値はあるのだろうか。そんな疑心暗鬼に答えてくれるのは梅棹だ。分散してあるという極意を教えてくれる。コンピュータの無い時代の彼の取り組みは、コンピュータにさせるべきタスクにはかならない。

情熱をかたむけつくしたモンゴル 梅棹は『梅棹忠夫著作集第二巻 モンゴル研究』(一九九〇年、中央公論社)のまえがきで「わが青春の情熱をかたむけつくした」と回想している。また、『知的生産の技術』で「野帳の分量がおおいと、野外

梅棹は世界各地を歩くことによって未来の構想に資するよう文化人類学を方向づけ、「知的生産」の装置の集大成としてみんぱくを創設した。彼の残した資料をたどりながら、二二世紀における知的生産のフロンティアとは何かを考えよう。



# 梅棹忠夫 アーカイブズの ねらい

久保正敏 民博名誉教授

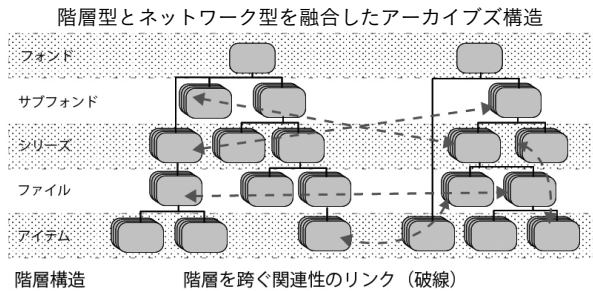
## 創設以来の懸案、アーカイブズの整理

民博には、館内外の研究者が残した資料が多数保管され、その整理は創設以来の課題だった。一般の公文書や史料と異なり、文書やメモ、写真、フィルム、音声資料などマルチメディア資料が多い、私信など公開の難しい資料が多い、などの特徴がある。そこで、二〇〇五年三月、図書委員会に「アーカイブズ検討ワーキンググループ」が置かれ、二〇〇六年度には「アーカイブズ部会」が立ち上がり、「民族学研究アーカイブズ」と銘打って整理と公開に向けた作業が始まった。

一方、梅棹忠夫初代館長は長年にわたる自身の記録資料の保管と整理を続けていた。一九九三年の退任後は、「梅棹資料室」とよばれる部屋で、民博顧問として整理を続けたが、その膨大な資料が収められた部屋は、民博のなかではつきりと位置づけられているわけではなかった。

## 梅棹忠夫アーカイブズの特徴

梅棹が意図的に残した資料はじつに幅



最上位を「フォンド (fonds)」とよぶ階層構造が国際標準だが、階層だけであらわせない資料間の関係はリンクとして表現する必要がある。梅棹忠夫アーカイブズに「文学フォンド」と「生物学フォンド」があるとすれば、両者間にリンクが数多く存在するに相違ない

広く、「記録魔」の面目躍如といえる。フィロドノート、スケッチ、写真などフィロドワークで作られた資料から始まり、アイデアをまとめたカード、それを整理し原稿の段落梗概をしるした「ござね」とよばれるカードも含む。一次資料から二次、三次生成物、最終成果たる著作に至る知的生産活動の記録だ。それに加え、書評や紹介記事などもある。いわば、知的生産から消費まで、情報の上流から下流の大河まで、活動すべてを跡づけることが可能なのだ。対象は、調査探検、学会や学術団体などのほか、文化行政、一九七〇年大阪万博、民博創設準備の諸活動にかかわる資料も含む。梅棹の幅広い関心を反映し分野も多様である。

情報論、比較文明論、女性論、日本論、家庭論、展示論、研究経営論などの研究史資源としても貴重だ。おまけに、館長時代の各種会議資料も几帳面に残されているので、民博の公文書アーカイブズの性格ももち、個人アーカイブズの域を超えている。そこで二〇一一年度から、「梅棹忠夫アーカイブズ研究プロジェクト」が資料の整理保存、目録作成の作業を開始し、劣化の進んだ紙資料のデジタル化とウェ

ブ公開を始めた。

梅棹資料室は、二〇一三年四月に館長直属組織に位置づけられ、それまでの経緯もあって筆者が初代室長を務めた。梅棹の残した資料を整理・保存し、学問の成立過程だけでなく各分野の歴史を解明する基盤として、研究者による参加型・成長型の梅棹忠夫デジタルアーカイブズを構築するのが目的である。

## 新しい構造のアーカイブズを目指して

一般にアーカイブズの整理は、一九九四年に制定された国際標準に基づき、物理的、あるいは意味的な階層構造を前提とする。しかるに梅棹の知的生産は、周知のとおりアナロジーによる発想に基づくことが多い。「情報産業論」のように、文明の発達を動物の発生活過程とのアナロジーでとらえるのだ。つまりこのアーカイブズに含まれる資料間には、階層関係ではとらえきれない、梅棹の自由な発想の元となった相互関連があるはずだ。それを解き明かすには、階層と関連性リンクを組み合わせた構造をもち、梅棹忠夫アーカイブズを整理しているアーキビストの知見や、研究者が発見した関連性を反映させていく仕組み、いわば、利用者の参加による成長型のアーカイブズが望ましい。これは、梅棹が奨励した共同的な知の創造にかなう。こうした新しいタイプのアーカイブズを試作し、民博の公文書アーカイブズを含む他分野のアーカイブズへも応用可能なことを示していくことを、筆者としては後続に大いに期待している。

# 今日の 知的生産の 手法

堀正岳 研究者・プログラマー

梅棹忠夫の卓抜した民族学的才能を手元で支えていたのが、B6サイズの情報カードやござね法といった、情報を扱いやすく収集・編集する「知の技法」だった。



Evernoteで新聞記事をスクラップした画面

たことは広く知られている。そんな梅棹が、今活躍していたなら、どんな技法を生み出していただろうか。今日、学者のみならず一般の人びとも悩ませているのは、インターネットの発展による情報の爆発だ。ネットの情報をおいかにして使いこなすかは、まさに現代のフィロドワークの技法といってもいい。しかし手に入る情報がいかに多くなったとしても、梅棹の情報カードにみる情報の原子化と、ござね法にみられる異なる情報の並び替えから新しい情報を生み出す手法は、原則に変わりはない。ツールをネットに対応させればよいのだ。

## ネット時代の情報カード

例えば、ネット上で利用できるメモツールであるEvernoteは、文章やウェブページ、写真などをなんでも保存してくれる、まさにデジタル時代の情報カードだ。Evernote上の情報はスマートフォンからも閲覧可能なので、発想が浮かんだときいつでも手元に引き出せるというメリットもある。また、写真や手書きのスケッチ、音声の録音といった情報をいつでも追加することも可能だ。ネットにある情報は、ネット上のツールであるEvernoteで収集・整理するのがいちばん扱いやすい。

現代のツールは新しい知的生産の技法も可能にし



梅棹資料室のキャビネットに収められている、梅棹が作成したB6カード。これらは「知的生産の技術」のもとになった

ている。例えば広く使われているMicrosoft WordやGoogleドキュメントのようなツールも、複数人で同時に編集することが可能になっている。書いた草稿をいちいちやりとりせずとも、オンラインでチャットを

開き、離れた場所にいる相手と議論しながらリアルタイムで論文を手分けして執筆するという作業方法もすでに一般的だ。技術的なハードルがなくなり、コンピュータ端末とネット環境さえあれば、どれだけ離れていても共同して知的生産を実践できる、夢のような時代といつていい。

しかし重要なのは、これらの手法が梅棹の実践した情報カードや知的生産の技術と置き換えられるものではないという点だ。いくら多くの情報がネットでは検索できても、古い資料や文献が散逸するのと同様に、ネット上の情報もまた日々失われている。むしろネットの時代だからこそ、あとに証拠も残さず消えてゆく情報の海から知見を救い出す新しい手法が問われているといつていいだろう。集めた情報から新しい情報を生み出す創造性は、古いツールと新しいツールの共演によってこそ成し遂げられるのだ。



## 学術探検と知的生産

一九五五年の「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」は、カラコラムとヒンズークシというふたつの山岳地帯を舞台としたスケールの大きな学際的調査だった。後年のユーラシアにおける農牧文化複合の研究やアフリカでの霊長類・生態人類学などがここから派生していくのであり、まさに「日本のフィールドサイエンスの原点」とよべるだろう。

この京大による調査から三〇年後にわたしはカラコラムに足を踏み入れ、足かけ一〇年にわたってフィールドワークをおこなった。当時、中国とパキスタンを結ぶ幹線道路が開通したことで、カラコラムは商業

ルートならびに観光地として脚光を浴びつつあった。住民参加型のNGO活動が活発になり、人びとの生活には大きな変化が訪れていた。学術調査に関しては、Culture Area

(Markum (CAK) というドイツ人による大型プロジェクト(一九八九〜九八年)が進行的であり、複数の谷のあちこちに、自然地理学、文化人類学、言語学等の研究者を長期滞在させて、環境と文化

の相互作用を解明しようとしていた。CAKのメンバーとは何回も顔を合わせ、たがいの調査テーマについてよく議論したものである(わたしの初めての英語論文はCAKの論文集に収録された)。じつ

は京大と同時期に、ドイツ人もカラコラム探検を始めており、CAKはその発展形であった。

### 多様な成果とその価値

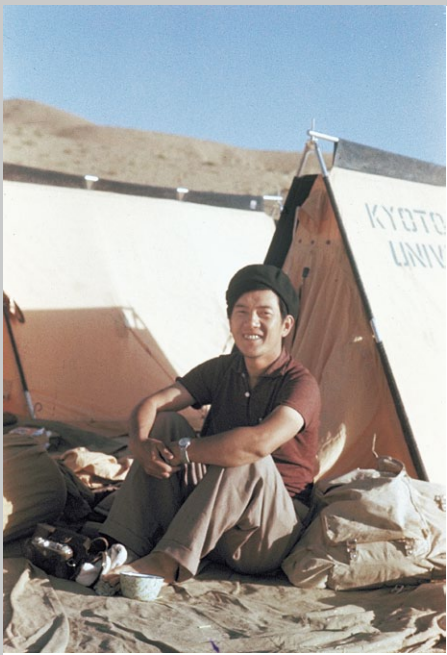
一九九〇年代末に至って、ドイツの学際研究がようやくひとつの到達点を迎えたことを考えれば、まったくの手探り状態でおこなわれた一九五〇年代の一度の探検から、植物学や地質学の英文報告書のみ



NGOが女性による手工芸作りを推進し、地元のお土産として販売されている。日本人観光客に向けた看板もある(パキスタン、フンザ谷、2003年)

門の違う友人間で共有財産としていたことがわかる。異分野のメンバー同士が、それぞれの発見をもとに、現場で自由闊達に議論する。これこそが京大探検隊の最大の強みだったのでないだろうか。

今回、この小文をまとめるにあたり、DVDブック『カラコラム／花嫁の峰 チョゴリザー——フィールド科学のバイオニアたち』(二〇一〇年、京都大学学術出版会)、CAKの論文集、そして自らの博士論文まで引っぱり出して目をとおした。その作業をとおして、「大きな研究テーマを設定し、常に新しい発見をめざすべし」と意をあらたにすることとなった。「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」は、研究者のインスピレーションの源泉として、これからもその価値を保ち続けることだろう。



テントの前で笑顔を見せる梅棹。アフガニスタン西部の山中ゴラートにて(X0227377、1955年、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

## 東南アジア学術調査

信田敏宏

民博 グローバル現象研究部

### 梅棹忠夫の「移動研究室」

一九五五年、カラコラム・ヒンズークシ学術探検から帰国した梅棹忠夫は、まもなくして、当時所属していた大阪市立大学が派遣する東南アジア学術調査隊に参加することとなった。準備に追われるなか、一九五七年二月には、カラコラム・ヒンズークシ学術探検から着想を得た「文明の生態史観序説」(後の「文明の生態史観」の元になる論考)を発表し、一躍時の人となったのである。そして、同年一月、三七歳の梅棹は、第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊の隊長として、タイに向け出発したのである。

一九五七年は、戦後日本における東南アジア研究の始まりの年であった。この年、梅棹の調査隊より少



梅棹が「移動研究室」と称した三菱製ジープ。3台の車それぞれに調査に必要な道具一式を備え、いずれも独立した研究室として行動できるようになっていた(X0244658、タイ、1957年、「梅棹忠夫アーカイブズ」より)

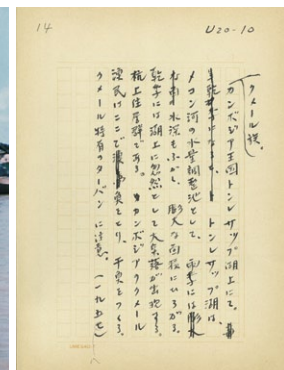
し早く、日本民族学協会が派遣する第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団が、メコン川流域を中心とするタイ、ラオス、ベトナム、カンボジアで調査を実施していたのである。団員には、綾部恒雄、岩田慶治などが参加していた。約六カ月の滞在期間、梅棹はタイを拠点にジープで駆けめぐったそうである。当初は、アンコール・ワットを訪れたり、タイのチェンマイまで足をのばし、カレンの人びとの村などを訪問している。その後、石井米雄を通じて迎え、カンボジア、ベトナム、ラオスをめぐる調査旅行に出ている。

### フィールド調査と読書

旅の移動中、梅棹は「移動研究室」と銘打って、ジープに積み込んだD・G・E・ホルルの『東南アジア史』(一九五五年)などの基本文献を車内や宿泊先で読み進めていたという。フィールドでの読書は、研究室や書斎での読書とは違い、現場で実際に確かめられるという利点がある。膨大な文献の渉猟とフィールドでの研ぎ澄まされた感覚、そして、さらなる情報収集



1957年、梅棹がカメラにおさめたうちの1枚。カンボジアのトンレサップ湖上で撮影された写真からは、クメール族の日常生活が垣間見える。右は、写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」(1982年開催)の際に梅棹が書いた解説原稿(左:X0223585、ともに「梅棹忠夫アーカイブズ」より)



幾重にも重ねあげるデータと、そこから編み出されていく理論が文明に対するより深い洞察につながったのであろう。

このときの調査を基に執筆した『東南アジア紀行』(一九六四年、中央公論社)において、梅棹は、「移動研究室」をはじめとしたさまざまな興味深いエピソードとともに、調査隊の活動や現地での情報収集の方法について余すところなく記述している。梅棹や隊員たちが撮影した写真は、モノクロで約二万コマ、カラーは約二〇〇〇コマという膨大な数にのぼり、そのほか、フィルムや録音テープも残されているという。当時の東南アジアの様子を伝える写真については、その一部が、岩波写真文庫の『タイ——学術調査の旅』および『イ

ンドシナの旅——カンボジア・ベトナム・ラオス』(ともに一九五八年、岩波書店)にまとめられている。梅棹の写真には、人びとの何気ない日常がおさめられており、ありのままの姿や表情、当時の生活が生々しく写し出されている。文章ばかりでなく、写真にもこだわりを見せた梅棹の研究スタイルは、その後、写真を多用する本誌に受け継がれていったといえるであろう。



# ウメサオの霧箱

## 探検的思考のための装置

『知的生産の技術』のなかで、梅棹は、ひらめきや発見はわたしたちにも日々訪れるが、すぐに消えてしまう。これらをきちんととらえて自分の思想の素材に育てるためには、見えない宇宙線の軌跡を可視化するウィルソンの霧箱のような装置が必要だと述べている。わたしは高校一年生で初めてこのことばと出会ったときの感動を、今も鮮明に覚えている。大学で数学とコンピュータ科学を学び、最近二〇年間は、大量の電子情報を人間の創造的思考に生かす情報技術を追求してきたわたしにとって、この「ウメサオの霧箱」は、ひらめきを生み、思考を深める情報環境について考えるための基本的指針となってきた。

今回、企画展「知的生産のフロンティア」の準備のため、梅棹が世界各地のフィールドワークを通じて残した膨大で多様な資料群（フィールドノート、スケッチブック、写真、それらを整理したカード、こざね、著作等）をつぶさに眺める貴重な機会を得た。「梅棹忠夫アーカイブズ」に整理され、蓄えられてきたこれらの資料群について、電子化が進められ、相互の参照関係が機械可読なリンクで整理されることにより、これらの資料群こそが梅棹の発想の源泉だったことを強く実感した。

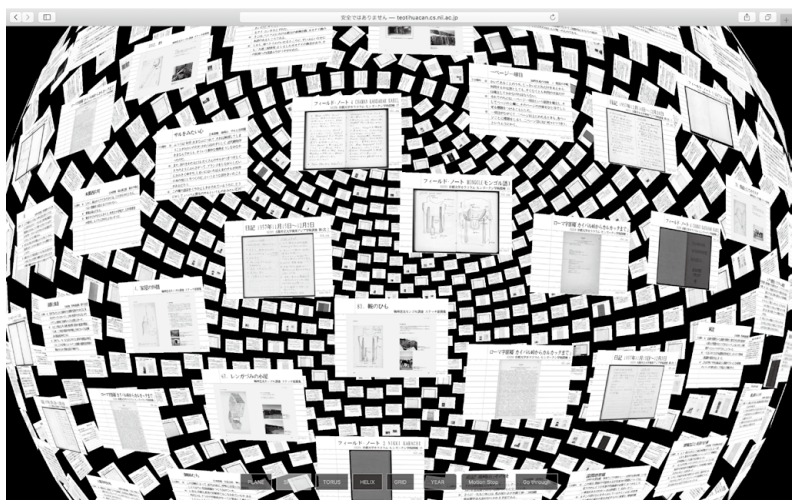
### 梅棹の探求スタイル

「霧箱」に、梅棹は何を溜めて、何を見てきたのだ

えたひらめきを記録して霧箱に溜め込み、それを使って次の発見を探るのである。ある霧箱で見えたものに基づいて、次の思考のための霧箱が作られる。「霧箱サーフィン」ともよべるこのダイナミズムこそが梅棹の真骨頂だったと感じる。

### 情報の百科事典

情報の整理と活用法については、一九四五年にヴァネヴァー・ブッシュが提案したメモックスが有名だ。マイクロフィルムに記録された膨大な情報を活用して



企画展で公開予定の「梅棹忠夫アーカイブズ・クルーズ」(開発:阿辺川武、2020年)。球やトラスの形に配置された梅棹関連資料群を3D空間で自在に操作しながら、資料の選択や並び替えによってあらたな関係性を探るシステム。個々の著作や関連資料をeReader(下図)で開いて、詳しく閲覧することもできる

たかの あきひこ  
高野 明彦 国立情報学研究所教授

ろうか。「発見の手帳」こそが自分にとつての霧箱であり、一枚一項目主義で書き込むカードの集まりが「手帳」の新しい形だと説明している。あるときは、キャラバンの車に揺られながら、目や心に映るものを次々とローマ字のタイプライターで打ち込む。出会った人びとや出来事をスケッチや写真の形で記録する。またあるときは、持参した書物を読み進めながら、それまでに記録した写真やスケッチと文献に書かれていることの新しい結びつきに興奮する。もちろん、自分が書き溜めてきたフィールドノートを読み返すことで、目の前の事物と過去に撮った写真が結びつくこともある。

このようにカードやこざねを駆使して、霧箱の中身と観測する対象を、いつでも自在に入れ替えながら、「考え・書き・読む」という活動を切れ目なく繰り返している姿が目には浮かぶ。自分がとら

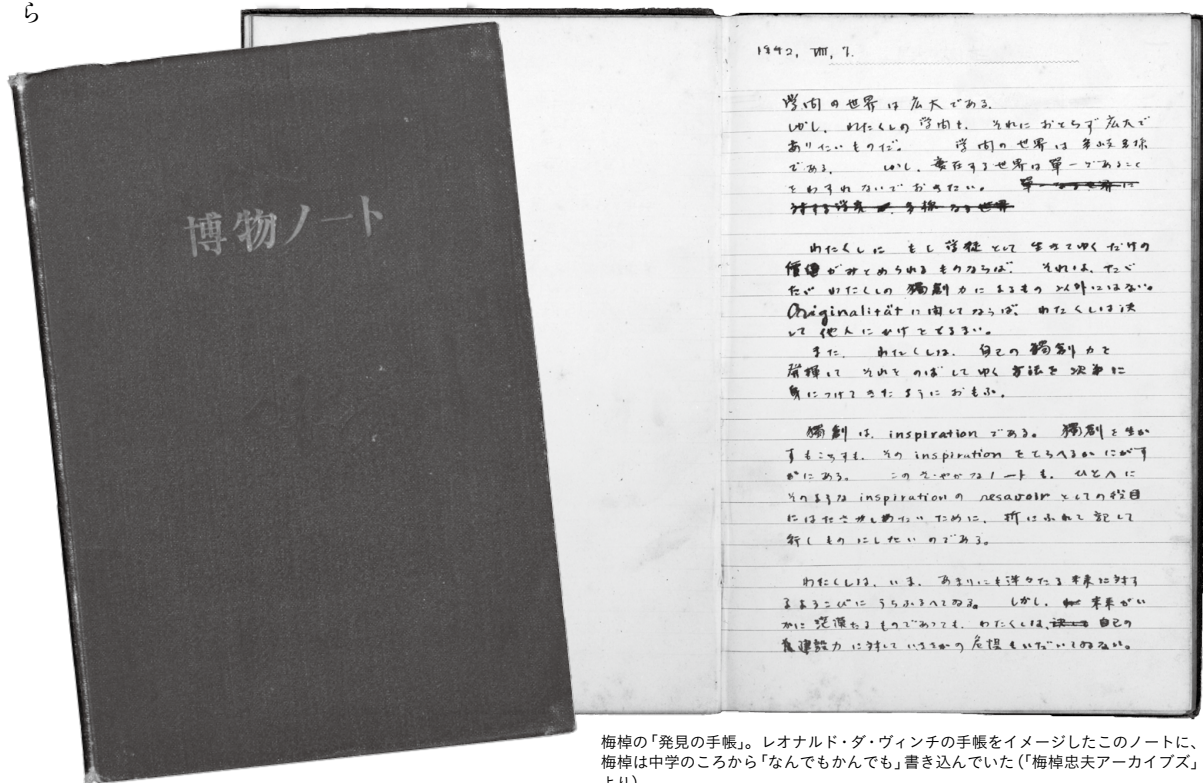
人間の記憶を拡張するシステムが図解入りで提案され、それが現在のハイパーテキストやウェブの発明に概念的な基礎を与えたといわれている。当時、米科学研究所開発局長としてマンハッタン計画の推進に深くかわり、全米科学者の三分の一を指揮していたブッシュの傲慢ともいえる全能感と、人類の科学的な全知識を百科事典のように整理してマネージしたいという強烈な欲望を感じる。

メモックスやその影響を強く受けて発達してきた現在の情報技術は、できるだけ多くの知識を収集整理して、それらの体系化を進めることを目標にしている。そこでは、属人的ではない形で考えの機序や根拠が示され、第三者がいつでもその正当性を確認できることが重視される。ハイパーテキストやハイパーリンクは、このような静的な関係性を表現する仕組みとして導入されてきた。

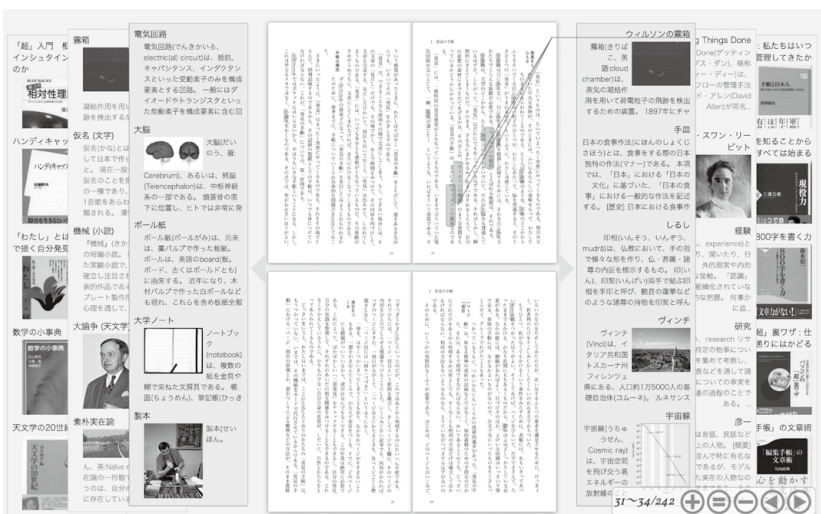
### 体系化の先へ

『知的生産の技術』に書かれた梅棹の提案を、B6判カードの採用やローマ字記述による情報整理法と、こざねを活用した文章作成術として要約するのはおそらく間違いである。この本の最大の貢献は、彼の生涯にわたるフィールドワークを実例として説かれる探検的思考の方法論である。フィールドにおける体験や観察を、「考え・書き・読む」という活動の切れ目ない繰り返しにうまく接合する「ウメサオの霧箱」は、探検的思考のための装置に他ならない。

しかし、探検的思考のダイナミズムを表現するメディアとして、現在主流のハイパーテキストは不十分である。知識と知識の関係性として静的な関係づけ



梅棹の「発見の手帳」。レオナルド・ダ・ヴィンチの手帳をイメージしたこのノートに、梅棹は中学のころから「なんでもかんでも」書き込んでいた(「梅棹忠夫アーカイブズ」より)



「eReader読書環境」で梅棹の著作を読む。著作の本文を他の資料や百科事典等の外部データベースと自動的に関連づける。辞書引き関係だけでなく、内容的な類似性をとらえる連想検索も利用できる

しか記述できないことが本質的な制限となっている。探検的思考の主体が自分の脳に溜め込んでいる記憶の違いや、分析対象として取り上げる体験の組み合わせの違いなどにより、「霧箱」でとらえるべき知識間の関係性は動的に変化するものが自然だからである。対話しながら、思い浮かべている景色が変化していく様子をとらえられるような情報表現法が必要だ。梅棹から我々に託されたこの課題に取り組んでいきたい。